

唐代伝奇「離魂記」の虚と実

閻 小妹

一 はじめに

中国では古代から人間には魂と魄があるとされてきた。『礼記』の「郊特牲」に「魂気帰於天、形魄帰於地」とあるように、人が死ぬと肉体は亡びさるが、魂は肉体から離れ、天地に帰ると言われ、また「土喪礼」において死者の魂を招き返す招魂の風俗儀式が記されている。この魂魄思想に基づいて、人間の肉体から魂が抜け出して、思うままに自由に飛んでいくという発想は『楚辞』、『莊子』などに見られる。後に、六朝の「志怪小説」に「離魂」という形で伝承され、唐代になると、伝奇というジャンルの文学作品のモチーフに使われて、大きく花を咲かせる。その代表作の一つが恋愛物語の「離魂記」（『太平広記』三百五十八卷・神魂篇）である。それは女が体を実家に残したまま、魂だけが相思相愛の男と駆け落ちし、また戻ったという実に不思議な世界であった。

本稿はこの作品のモチーフ「離魂、合体」を使用する書き手の意図、作品の背後にあったものを探ってみようと思う。

二 虚構としての離魂話の系譜

小南氏は唐代伝奇によく出ている怪と異について「鬼神や超自然の存在が引き起こす出来事のみならず、人間に関わる異常事態、とりわけ男女の普通ならざる恋愛事件などもまた「異」なる事件だとされた」¹と解釈している。

この普通ならざる恋愛における離魂現象について、まず「離魂記」と直接関係のある話としてよく引きあいに出されるのは、同じく『太平広記』三百五十八卷神魂篇に収められた六朝の志怪「龐阿」である。以下は概略を記す。

石女という娘は、妻帯者龐阿の美貌に一目惚れし、彼の家へ行ったところ、その妻に発見されて捕まえられる。石女を縛り付け、下女を使って実家に送り届けるが、途中石女が消えてしまう。石家の父親は下女の訴えに驚き、我が娘を誹謗中傷するのは許せないと怒る。龐阿の妻はその後再び石女を捕まえて、自ら石家に訴える。石家の父親は目の前の娘に驚きながら、実は娘が家にいたと弁明する。そこで下女に娘を呼んでくると命じる。しかし、そのうち捕まえられて来た娘がまた消えてしまう。父親は母にその事を問いつめさせる。娘の自白によると、密かに龐阿に好意を持っていたので、夜に夢の中で朦朧と龐阿の所へ行ってしまうという。結局、龐阿の所へ行ったのは石女本人ではなく、「神魂」だと「記録者」が解釈する。

（鉅鹿有龐阿者、美容儀。同郡石氏有女、曾内覩阿、心悅之。未幾、阿見此

女来詣阿、阿妻極妬、聞之、使婢縛之。送還石家。中路遂化為煙氣而滅。婢乃直詣石家。説此事。石氏之父大驚曰、我女都不出門。豈可毀謗如此。阿妻自是常加意伺察之。居一夜、方值女在齋中、乃自拘執以詣石氏。石氏父見之愕眙曰、我適從内来、見女與母共作。何得在此。即令婢僕於内喚女出。向所縛者奄然滅。父疑有異。故其母詰之、女曰、昔年龐阿来廳中。曾竊視之、自爾彷彿即夢詣阿。及入戸。即為妻所縛。石曰、天下遂有如此奇事。夫精情所感、靈神為之冥著。滅者蓋其神魂也。既而女誓心不嫁。經年阿妻忽得邪病。醫藥無徵。阿乃授幣石女為妻。出『幽明録』)

魂は体から抜け出して行きたいところへ飛んでいくことが、『莊子』の「胡蝶の夢」の「夢遊」と基本的に似ているが、ただし、魂の実態（存在）が他人に見られ、捉えられるというのは「龐阿」の大きな特徴であり、魂が体から離れる「離魂」現象を物語のモチーフとして使う作品のうち最も早い例だと言われている。ただし、「夢遊」は基本的に自分自身の体験を自ら語り、公表するのだが、「石女」では魂の実態が人に見られ、捉えられてしまうのは、いわば第三者、世間の人に認めてもらい、共有する意図があると考えられる。この場合「見られる」「知られる」ことが物語の最も重要な要素であろう。

この作品に記録されている「離魂」現象について丸尾氏は「石氏の娘の離魂は龐阿への押さえがたい恋情によって起こった。龐阿は妻帯者であり、許されない恋である以上、石氏の娘の魂は肉体を抜け出て、龐阿の所へ通うしかなかったのであろう。」ⁱⁱと理解を示している。

石女の龐阿への恋は許されない。それは女が既婚の男に惚れて通うのは、儒教の道德倫理上、家族制度上では想定外のことで、社会秩序の枠組みにはみだしている行為だからである。龐阿の妻、石女の父親に見られてしまった石女の行動（女の「欲情」とも言える）に対して従来論理では説明できなかったの、この行動は意志を「離魂」という制御不可に陥れる不思議な現象、怪異現象だと解釈され、「神魂」だとしてしか処理できなかったのではなかろうか。

ただし、話はこれで終わるものではない。その後暫くしてから、都合よく龐阿の妻は突然病氣（邪病）で亡くなり、石女は正式に龐阿の妻になる。この奇怪な現象を、「記録者」、あるいは当時の一般的な考え方から見れば、男が女を求めるのはよくある話だし、一夫多妻の時代では、妻以外に女何人も関係を持つのも当たり前のことだが、その反面妻が嫉妬してはいけない。だから、石女の出現に怒り、石女を縛る龐阿の妻は「極妬」と見なされていた。それでも龐阿の妻に発見され、縛り上げた上に石の家に送り届けるのは当時の法においても許される範囲である。それにもかかわらず龐阿の妻が嫉妬という汚名を着せられた上に不思議な邪病で死を遂げる。一方、夜に未婚の女、況んやましてある程度身分もある良家の娘が既婚者の男の家へ潜り込むのは、この制御不可能な恋情による行動を「恋」と見なす現代人の感覚と違って、「常識」外れの行為と見なされている。やはり、世間では認められない、見たくもない「姿」なので、石女は二度捉えられたにもかかわらず、「中路遂化為煙氣而滅……向所縛者奄然滅」のように忽然と二度も消えてしまったと表現され、石家の父親は龐阿の妻に対して娘への「誹謗」だと言い、後に娘が龐阿に好意（恋情）

を持ってその関係を求めて龐阿の家に走ったと知りながらも、認めようとしなかった。結局、石家の家長である父親は娘の行為に疑問を持ちながら、家の名誉を守り、娘の希望通りに正式に龐阿と結婚させた。このような結末に対して「相手の妻の死によって、恋が遂げられる「龐阿」の団円は、いささか便宜的な展開と言わざるをえないが……」と、丸尾氏はその「嫉妬死」を軽く見ている。一方、石女の制御不可能な欲情（恋情）を如何に表現し、如何に世間、同郡の人々に納得、理解させるかは、この「記録者」の手腕、そして想像力にかかっており、そこで古代の魂魄思想に基づく「離魂」という虚構を見事につくりあげた。それに対する龐阿の妻が「嫉妬」のため「邪病死」で処理されてもはや問題がなかろう。

古代から天候の異常現象は国政の問題で、正史に「記録」されるが、志怪小説は往々にして個人の怪を記録するものだと言われている。「龐阿」の結末を見れば、この「離魂」現象を果たして怪の「記録」として理解すべきなのであろうか。やはり「記録」より判断、判定、解釈の行為と考えたほうがよいのではないか。

ここで、「離魂記」の類話として同じく『太平広記』三百五十八卷神魂篇に収められた「鄭生」を見てみよう。

天宝年間の末に鄭生という若者は官吏登用の試験を受けるために上京する。途中で宿の老婆に勧められ、その外孫女で淮陰県令の柳氏の娘と結婚した。数ヶ月後鄭生が妻を連れて淮陰の柳家に行くと、柳家一家はびっくりして、娘はずっと家に居るといふ。そこで家から出て来た娘は鄭生が連れて来た妻と一體となった（合体した）。じつは死んでいたはずの県令の母親が孫娘の魂を鄭生に嫁がせていたのだという。

（鄭生者。天宝末應舉之京。至鄭西郊、日暮投宿主人。主人問其姓、鄭以實對。内忽使婢出云、娘子合是從姑。須臾見一老母自堂而下。鄭拜見坐語久之、問其婚姻。乃曰姑有一外孫女在此、姓柳氏、其父見任淮陰縣令。與兒門相埒、今欲將配君子、以為如何。鄭不敢辭。其夕成禮。極人世之樂。遂居數月。姑謂鄭生可將婦歸柳家。鄭如其言、挈妻至淮陰。先報柳氏、柳舉家驚愕。柳妻意疑令有外婦生女怨望形言。俄頃女家人往視之。乃與家女無異。既入門下車冉冉行庭中。内女聞之笑。出視相值於庭中。兩女忽合遂為一體。令窮其事。乃是妻之母先亡而嫁外孫女之魂焉。生復尋舊跡、都無所有。出『靈怪集』）

出世した官吏にとって「與兒門相埒」という家柄、身分の釣り合っている名門の娘との結婚が夢であったので、誠にせつない話である。さらにこの結婚生活は『遊仙窟』を思わせる「極人世之樂」のように男の願望を満たすものであった。最後に二人の女、すなわち情欲の対象である妻が名門の娘と見事に合体する。この奇妙な合体の場面の描写「内女聞之笑。出視相值於庭中。兩女忽合遂為一體」は「離魂記」の「室中女聞喜而起、飾粧更衣、笑而不語、出與相迎、翕然而合為一體」と全く同じ趣旨であることに気づかれるであろう。

ここでは「邯鄲の夢」の立身出世を夢見る盧生と同じく、鄭生はいつか名門の娘と結婚できたらという夢を見ている一文人である。鄭生にとってこの現実世界、宿でもらった女を名門の娘に変えるのは、当然そう簡単に破れない厚い

壁があるはずである。そこで柳氏の「離魂」、「変身」のカラクリが行われた。柳氏の「離魂」は「抑圧された意志を魂というかたちで自分の体から飛び出させ、制御不可に陥れる不思議な現象、怪異現象」ではなく、柳氏本人と関係なく第三者に操作されて、出現したと考えられる。石女のような自発的な「離魂」とは違う現象であろう。つまりこの「離魂」現象は名門柳家の娘との結婚願望、鄭生の心底に切望している「夢」と理解したほうがよいのではないか。または鄭生の方から「変身してほしい」という、一方的な願望であろう。だから、物語の最後に「生復尋舊跡、都無所有」のように、以前泊まった宿などすべて無くなってしまふのである。宿で「極人生之樂」の女が自然消滅し、「淮陰縣令」の柳氏の娘が目の前に現れるという「離魂の合体」は鄭生にとって、これ以上都合のことがないのである。

以上のように六朝志怪小説「石女」と唐代伝記「鄭生」は同じく「離魂」が物語のモチーフに使われている。物語の主人公が女であれ男であれ、それぞれの視点の違いがあるが、書き手は虚構を意識して創作を行っていると言えよう。

三 「離魂記」のストーリー

「離魂記」は宋の類書『太平広記』三百五十八卷・神魂篇に「王宙」と題し収録されているが、当初は陳玄祐作の「離魂記」という独立した作品だったことが末尾の記述からわかる。わずか五百字ほどの短編記事のようなものである。ここで「離魂記」の概要を四段落に分けて記しておく。

天授三年（692）のこと、清河の張鎰には息子がいないものの、娘二人がいた。長女が早く亡くなり、次女の倩娘は聡明で美貌である。張の家に太原の王氏に嫁いた姉妹の息子王宙が居候している。美男で聡明な王宙に将来倩娘を嫁がせると張鎰はよく言う。王宙、倩娘二人は成長し、おのずと恋仲になる。

ところが、ある日、張鎰は上司にあたる幕僚の任官候補者から娘への求婚話を承諾してしまう。王宙はこの婚約話を聞いて、落ち込んでいたが、上京して職を探すと言って、倩娘の家を離れる。張家では止められないとわかると、餞別を沢山贈った。夜中に倩娘が王宙の舟まで追い掛けて来て、結局、王宙が倩娘を連れて一緒に四川へ駆け落ちする。駆け落ちの五年間に、二人の息子が生まれ、倩娘の提案で王宙と実家に戻ることにする。

実家では倩娘が病気で5年間床に伏して、王宙と駆け落ちするのがあり得ないと父親の張鎰が主張するが、駆け落ちした倩娘が家に帰ると、床から立ち上がった倩娘と合体し、同一の人となる。

その後四十年も経ち、倩娘と王宙が亡くなり、二人の息子は立派に孝廉に登り、丞、尉の官になったという。作者陳玄祐は幼い時からすでにいろいろと噂で聞いた話であったが、本当かどうか分からなかった。大暦の末、張鎰の叔父に当たる張仲規から事の詳細を聞かされ、記録した。

（天授三年清河張鎰因官家于衡州、性簡静、寡知友。無子、有女二人。其長早亡、幼女倩娘、端妍絶倫。鎰外甥太原王宙、幼聡悟、美容範。鎰常器重、毎曰、他時當以倩娘妻之。後各長成、宙與倩娘常私感想於寤寐、家人莫知其

状。

後有賓寮之選者求之、鎰許焉。女聞而鬱抑、宙亦深恚恨、託以當調請赴京、止之不可。遂厚遣之。宙陰恨悲慟、決別上船。夜方半、宙不寐。忽聞岸上有一人行聲甚速、須臾至船。問之、乃倩娘徒行跣足而至。宙驚喜發狂、執手問其從來。泣曰、君厚意如此、寢夢相感。今將奪我此志。又知君深情不易、思將殺身奉報。是以亡命來奔。宙非意所望、欣躍特甚。遂匿倩娘于船、連夜遁去。倍道兼行、數月至蜀。凡五年、生兩子、與鎰絕信。其妻常思父母、滯泣言曰、吾曩日不能相負、棄大義而來奔君。向今五年、恩慈間阻。覆載之下、胡顏獨存也。宙哀之曰、將歸、無苦。遂俱歸衡州。

既至、宙獨身先至鎰家、首謝其事。鎰曰、倩娘病在閨中數年。何其詭說也。宙曰、見在舟中。鎰大驚、促使人驗之。果見倩娘在船中。顏色怡暢、訊使者曰、大人安否。家人異之、疾走報鎰。室中女聞喜而起、飾粧更衣、笑而不語、出與相迎、翕然而合爲一體、其衣裳皆重。

其家以事不正、秘之。惟親戚間有潛知之者。後四十年間、夫妻皆喪。二男並孝廉擢第、至丞尉。玄祐少常聞此說、而多異同、或謂其虛。大曆末、遇萊蕪縣令張仲規堂叔、而說極備悉、故記之。出『離魂記』)

当時の実状に合うように時系列にまとめておくと、次のようになる。

1、692年ごろ～700年前後

天授三年つまり 692 年に張鎰が衡州へ赴任してから王宙が来たことになる。倩娘と王宙が何年間か一緒に幼少時代を送り、成人するまでに十年はかかると考えられるので、次の展開は 700 年以後であろう。

2、700年ごろ～710 ごろ

倩娘が父から幕僚に抜擢される有望な男との婚約を言われたのは適齢期から考えて遅くても 710 年までであろう。

3、710年～715年ごろ

駆け落ち五年後、二人の息子が誕生しており、実家に戻って離魂が合体する。

4、745年～755年ごろ

四十年後に倩娘と王宙が 60 才前後で亡くなった。その前に二人の息子が孝廉に推薦される。

5、755年～779年の間

大曆末 (779 年) におよそ二人の駆け落ちから七十年以上も経て、漸く張氏一族は張の兄弟の息子張仲規から王氏一族との関係を公表した。張仲規は王宙と同世代なので、80 才前後の老人になる。作者は王宙の息子世代であり、幼い時から噂を聞いていたので、60 才以上になる。

一方、もう一人の主人公王宙は弱い立場でありながら、聡明で、理性のある好青年と、情愛に溢れている夫として、一連の事態に冷静に対応したと、描かれているストーリーとして見ることもできよう。ⁱⁱⁱ

○張の約束違反に対して「宙亦深恚恨」「宙陰恨悲慟」心の中に恨みを持って、口には出さなかった。

○倩娘が駆けつけてきた時に、「宙非意所望、欣躍特甚」と駆け落ちは望んでいないが、倩娘の気持ちを素直に喜んで受け入れた。

○駆け落ち生活五年後、倩娘の親に対する気持ちを「宙哀之曰、将歸、無苦。遂俱歸衡州」と理解して、倩娘を慰め、すぐに実家へ連れて行く。

○衡州に着いてから、まず一人で倩娘の家に行き、父に謝罪をする。

上記のようにストーリーの展開の奇抜さから、『離魂記』は唐代伝奇の名作として後世に多大な影響を及ぼしただけでなく、恋愛物語の『李娃伝』『霍小玉伝』『鶯鶯伝』と並んで最も代表的なものと数えられる。しかし従来のとらえ方では、主人公の倩娘は親に勧められた結婚に抵抗し、幼馴染みの王宙への情熱の愛を貫いた女として後世に讃えられていた。

例えば、西岡氏は「この物語は離魂という怪を生み出すに至った若い男女の情熱的恋愛を委曲尽くして描きだしているのであって、「怪」なる事実はそのための道具だてに使われているのである。」と離魂現象を道具と見立てている。^{iv}一方、丸尾氏も離魂の問題について「なぜ出奔ではなく、離魂でなければならなかったか……倩娘は王宙への愛と親への愛という二つの愛によって、引き裂かれた存在だったのである。二つの愛を同時に成就することができず、さりとていずれか一方を捨てることもできぬ以上、倩娘は我が身を二つに分けるほかなかったのである。むろん一方は生ける屍として。……倩娘は人間としてのもっとも基本的な情愛を二つながら貫こうとして、自己を二つに裂かざるをえなかったのであり、離魂と合体とはかかる分裂の苦しみと、かかる分裂の克服すなわち団円のよろこびとを直接し語る文学的表象として作者によって選ばれたものだったのである。」と、解釈している。さらになぜ倩娘はここまで自己を犠牲にしなければならなかったかについて「家族制度のもつ重大な矛盾」と分析している。^v

それらの分析はたしかに倩娘の「離魂」現象に注目していたが、なぜ「離魂」という中国伝統的な「虚」の手法をもって描かなければならなかったか、その「虚」と裏腹に、当時の時代背景と作品の成立に関わる「実」の問題についての言及は少なかつたように思われる。

事実、『李娃伝』『霍小玉伝』『鶯鶯伝』のような恋愛物語がフィクションでありながら、時代背景、舞台、登場人物など実在のものと深く関わりを持っていたことは、小南氏の『唐代伝奇小説論』をはじめ、多くの研究で明らかになっている。^{vi}それらの作品のいずれのパターン^{vii}とも違う「離魂記」の背後にはどういう真実が隠されているかは課題の一つとして避けて通れないものとなっている。

四 「離魂記」の背景

以上の問題意識を踏まえて、具体的に当時の事例を参考にしながら、「離魂現象」という特異な内容を具えた「離魂記」を改めて分析してみたいと思う。その時代背景と作品の成立に関わる諸問題について、地名や人名などの固有名詞という手掛かりが乏しいため、いままでの分析が少なく、内山氏と岡本氏の論及があるぐらいであった。^{viii}

ここではまず「離魂記」の注目すべき点を四つに分けて特に従来言及が少

なかった(1)と(4)を中心に説明する。

(1)人物の設定とその関係

○父親の張鎰

張鎰の人物設定において、実在した唐の宰相張鎰という内山説に対して、名前が同じだけで他に共通点がないので岡本氏は同意しがたいという。ならば唐代伝奇の物語の主人公が名門貴族の家柄に属する人物だと設定される場合が多い中で、ここで唐代「十柱国」の第一と数えられている清河張氏一族と太原王氏一族の婚姻に関わる人物の登場する意味が全くないかということ、そうでもないと思われる。

張鎰は江南西道衡州の役人で、『新唐書』「地理志」によると衡州は人口十八万以上の州であるが、その官位は不明である。「性簡静、寡知友」と、その性格は控えめかつ穏やかで、派手な人付き合いをしなかったという。「簡静」と言う唐の呉兢著『貞観政要』には「夫不時者、在人君簡静乃可致耳」のように人格者の意味で使われている。「毎日、他時當以倩娘妻之」と娘を甥の王宙に嫁がせるとよく言ったが、その理由は、「幼聡悟、美容範」と少年の才能と容姿に偏ったものであった。しかも、張鎰の姉妹は太原王氏に嫁いでいたので、当初王宙に娘との婚約を口にするのも当時名門同士二代、三代にわたる婚姻が結ばれる実情を反映し、倩娘の父もそれを望んでいたと考えられる。実際に清河の張家は太原の王氏との婚姻が先代も後世もあった。(唐の朝廷から名門貴族内の婚姻を制限する命令を出された後にも事実上門閥間の通婚は絶えなかった。)

守屋氏の王氏一族と名族相互の通婚関係表によると、清河張氏とは2例しかない(南陽張氏との婚姻は4例で、本籍のない張氏とは3例)が、^{ix}守屋氏の調査以後に新しい墓誌が多く発掘されて、今回の調査では次表に纏めたように、『全唐文補遺』第2冊、第8冊の墓誌銘から清河張氏と太原王氏だけでもその婚姻関係が七例も見られる。^x

氏名	婚姻の相手	歿年
王守節の父王弼	母清河張氏	王守節天寶11年(753)
清河張信	太原王氏	張信儀鳳3年(678) 王氏景雲元年(710)
太原王府君	清河張氏	張氏景雲2年(712)
王元の父王師	清河張氏	王元開元7年(720) 母張氏通天元年(696)
王智言	清河張氏	王氏開元19年(732) 張氏開元26年(739)
太原王氏	清河張媛	張氏貞元元年(785)
清河張彦琳	太原王氏	張氏大中7年(854) 王氏大中8年(855)

さらに『隋唐五代墓誌彙編』陝西卷第2冊「王公妻清河張氏夫人墓誌」9377には清河張氏と太原王氏の婚姻が二代にわたり結ばれたことも見られる。

「王公妻清河張氏夫人墓誌」

唐故清河張氏夫人墓誌銘並序、布衣裴瀆撰、夫人姓張氏、清河人也。父允言、左監門率。……早娶王氏、生夫人。……父祈良媒、以得良婿、遂適於太原王公。

(大意：清河張氏夫人之父允言の妻は王氏で、娘は太原王公に嫁いだ。

「父、良媒を得んと祈り、以て良婿を得、遂に太原王公に適す。」)

張允言-妻王氏

|

娘-太原王公

以上のように、七世紀から九世紀の長い間、清河張氏と太原王氏の婚姻関係が続き、張氏が王氏を望んだり、二代続きの婚姻関係もあった。

「離魂記」の場合、張鎰が幕僚の中央官僚候補者から娘への求婚に応じたことについては、官職との関係で結ばれる「婚仕」の場合、求婚を断れなかったか、自ら望んでいたかは不明である。官僚候補者と王宙との官職を比べてもはっきりとした差がさほどないとしながら、「張鎰の心変わりにある」というのは内山氏の見解である。^{xi}ただ、張鎰は娘を甥の王宙に嫁がせると言いながら、「後各長成、宙與倩娘常私感想於寤寐、家人莫知其状。」とその二人の相思相愛の様子に家族のだれも気づいていなかったためか、故意に二人の関係を壊すという表現は見当たらない。さらに(5)でも分かるように事件の顛末は張鎰の兄弟から聞いた話で、自ら家族に不利益のこと、王宙との婚約を放棄するようなことを詳細に公表する理由が見当たらないので、やはり求婚を断れなかったと考えられる。

求婚を断れなかった可能性というのは、当時では貴族名門出身ではない幕僚の中では名門の娘を奪う事件が実際にあったことから推測される。兪鋼氏の論文「唐代王慶誥墓誌に見られる太原王氏婚姻関係」^{xii}によると、2006年出版された『全唐文補遺・千唐志齋新蔵專輯』に「王慶誥墓誌」があり、墓誌には「次女先亡」と簡単に書いただけで、それ以上のことに触れようとしなかった。しかし、唐史などでは酷吏来俊臣が名門太原の王家の娘を妻にする話が記録されている。『新唐書・来俊臣伝』ではこの事件を以下のように記録している。

始王慶誥女適段簡而美、俊臣矯詔強娶之。它日会妻族、酒酣、遂忠詣之、閤者不肯通、遂忠直入嫚罵、俊臣恥妻見辱、已命驅而縛於廷、既乃釋之、自此有隙、妻亦慚自殺。

王家が来俊臣の求婚を断れず、さらに王家の娘が来俊臣の無頼の行動に恥を感じて自殺した、と一大事件として朝廷内外に知られている。来俊臣が696年に殺され、王慶誥は699年に死亡という時期を考えれば、天授三年(692年)から間もない時期に、太原王宙の周りでは張家を含めて当時の人々は来俊臣の噂をまだ生々しく記憶に留めていたと推測される。

○太原の王宙

少年時代から王宙はなぜ張鎰の家にいるのか、語られていない。そこで太原の王氏一族が次のような事件に巻き込まれた時期と重なることに留意すれば、

王宙は張家に避難していたと推測できる。

「離魂記」冒頭の天授三年（692）から暫くして神功元年（697）に謀反事件が起こり、太原王氏一族が事件に巻き込まれる。王氏三兄弟が誅されるが、その際、家族、親戚の多くは地方に逃げたりして難を避けたという。^{xiii}

一方、王宙は張鎰が婚約を破ることに對して、「宙亦深恚恨、託以當調請赴京、止之不可。……宙陰恨悲慟、決別上船」と、恨みを持ちながら不満をなにも言わなかった。これは王宙が物言える立場ではなかったからだと推測できる。なぜかと言うと、結婚は双方の親によって決められ、家と家のつながりが重視される時代なのに、王宙の場合、親はそもそも登場しない。つまり、王宙は親のいない弱い立場におかれ、張家の婚約「私約」違反に抵抗できずに、自ら身を引くしかなかった。

(2) 駆け落ちと帰宅について

○倩娘の異常行動

倩娘は王宙に対する情愛の気持ちは変わらなかったが、親が約束を破る「食言」に對して不満を言えない。親に決められた結婚、儒教的倫理に当然従うべきだとされており、倩娘には親への義務、王宙への愛に挟まれて、他の選択肢がなかった。幼馴染みで相思相愛の二人の若者がいままで決して礼に反するような行動はなかったが、倩娘は夜半に裸足で王宙が乗っている舟へ駆けつけるという、大胆な「異常行動」が行われたのである。

○王宙の対応

王宙は倩娘への情愛の気持ちは終始変わらなかった。さらに倩娘の気持ちを優しく受け止める。倩娘との婚約を破る張鎰への恨みを持っていても倩娘が実家に帰りたいたいと言うと、すぐに「宙哀之曰、將歸、無苦。遂俱歸衡州」と倩娘を慰め、実家へ連れて帰ることにした。

(3) 娘の駆け落ちを否定する父親の態度および娘の合体について

そもそも娘がずっと病気で家にいるはずだという張鎰の主張に疑問を呈しているのは、早くは明の小説集『剪灯新話』の作者瞿祐である。「離魂記」はその「金鳳釵記」に翻案された。興娘の妹慶娘と興哥は駆け落ちして一年経って、実家に帰ると、慶娘の父が駆け落ちしたことを認めず、娘が病で床に伏していると言う。すると興哥は「きっと娘の駆け落ちを都合が悪いと思い、家族の不祥事を隠そうとしている」と、父親の弁明の裏を読み、納得する場面があった。

^{xiv}

駆け落ちした娘の異常行動を認めようとしなないのは、前述した「龐阿」の石女の父と同じである。しかし「離魂記」の場合、石女の「魂」のように二度消えることはなかった。五年間の駆け落ち生活で息子二人も儲けたので、消える訳にはいかない。かくて物語のクライマックスは、体を離れて飛んで行った倩娘の魂は家から出てきた倩娘と何も喋らず、動画のように両者の体がピッタリと合わさるといふものになった。この奇妙な合体は映像的に読者の前に写し出され、今の私たちが読んでもなかなかスリルがある。王宙への愛の為の駆け落ちを「離魂」、親への愛の為の実家帰りを「合体」と読む丸尾の分析^{xv}は(4)の部分で切り離した結果だろうと思う。

(4) 隠された異常事件の公開について

駆け落ちをした倩娘の魂は病床に臥した倩娘の体と合体したことにされた後、家族は必ずしも喜んでいなかったようで、これは不正常的な不祥事として、この不思議な出来事すら隠され、親戚内の一部の人だけに知らされた。つまり、不正常的な不祥事を不思議なことにするのは、物語の「離魂」モチーフであり、志怪小説「石女」に由来するものであるが、それでも同時に現実と密着した異常事件なのであった。この事件の真相は張鑑直系の兄弟張仲規から作者陳玄裕が聞いたものである。「もっぱら一族内部の身内に関わる話題」が、そこでは「物語として語られていたのであった」^{xvi}。一方、やむをえず約束を破ったのは張鑑であり、駆け落ちしたのも倩娘主導であるが、駆け落ちから実家に戻るといふ一部始終は王宙の視点から述べられたもので、物語では彼の一連の事態に冷静に対応した行動に対して好意的だったと言えよう。

「離魂記」はまだ完全に志怪の旧套を脱し切っていない。話の枠組みは『石氏女』（＝「龐阿」）とほとんど変わらず、クライマックスの事件は奇怪性を強調するものだし、物語の世界とそれを伝える人物とは別である。語り手は編末に顔を出して、事の顛末を語り、物語のリアリティの保証と作中人物と親しい友人であることを告げる。これは志怪の常套手段であった。」というのが西岡氏の結論であるが、むしろ伝奇物語の末尾は、小南氏が指摘されたように、こうした注記を通して、一族内部に秘められていた物語が、やがて官僚社会の中で語り伝えられ、さらに、それが文字に定着されることになった一つの例であり、書き手の意図を伝えるために書かれたものだと理解すべきであろう。つまり、名門氏族が社会的に大きな規制力を持っていた時代であれば、王宙との口約束、中央官僚候補者との婚約に対して二度にわたる張家のやむを得ない婚約違反、娘倩娘の駆け落ち行為は、門閥貴族内部でも外部の世間でも常規を逸しており説明できない。実際に一族内部でひたすら隠し続けるしかなかった理由がここにあったと、考えられる。「玄祐少常聞此説、而多異同、或謂其虛」（この事件について語られるのを若い頃からたびたび聞いたが、様々な風説があり、この出来事自体がありもしないことなのだという者まであった。）と陳玄裕は書いている。結局この異常事件の公開は王宙、張一族に対する様々な噂に対して、誤解、汚名を雪ぐこと、あるいは自己弁護が目的ではないかと思われる。張家の親族に自ら認められ、文字に定着したこの物語では、それぞれ難しい立場に立たされた張鑑、王宙、倩娘（子供の存在があるので）を弁明しようとする意図があると見受けられる。あるいはこれこそ、隠されていた書き手の真の意図ではないか。

五 まとめ

「離魂記」の中で主要な役割を果たしている王宙と倩娘、張鑑三人の人物であるが、王宙と倩娘との恋愛関係は父親張鑑が幕僚候補者の求婚に応じたことによって壊れそうになる。しかし直接緊張関係を作った第三者、求婚者に関しては、具体的に何も明かさないうまでであったので、悪役が不在であったと言えよう。悪役のない「離魂記」が恋愛物語として、『李娃伝』『霍小玉伝』『鶯鶯伝』のように複雑に展開されなかった理由は、上述したように主要登場人物

の形象論的な乱れが見られなく、主役の三人の性格は一貫しているからとも考えられる。それにしても、いままで倩娘は高く評価されてきたが、一方の主要人物の王宙を論じることが少なかったように思う。もっとも表現方法として「王宙の立場に限定し、王宙が知り得たことのみを書くことによって、読者にも情報が不完全にしか伝わらず、却って描写の臨場感を増すようになって」と、溝部氏が指摘しているが、^{xvii}王宙の人物像及び物語展開の中での役割については論じてない。王宙の視点から見た駆け落ちの事件の一部始終は張一族に認定されたものであったので、『太平広記』では「王宙」の名を出すのもその理由によるのであろう。ただし「離魂記」には、石女をめたく正式に龐阿と結婚させたのと違って、倩娘と王宙とが正式に結婚したことを書いてなかった。「後四十年間、夫妻皆喪。二男並孝廉擢第、至丞尉」と、生前に公表されなかった二人の関係は死後、ようやく夫婦として認められ、また、子供二人の出世も「孝廉」^{xviii}によるものだという。子供二人の誕生、成長、その存在は張家より王宙、太原王氏一族にとって、この物語の中ではじめて重要な意味を持つてくるのではないか。

太原の王氏は山東貴族集団^{xix}の中でもその没落がもっとも速く急に衰退した経緯を考えると、駆け落ちという不祥事を乗り越えて、二人の息子が立派になったという前提があったからこそ、一族内部に秘められていた出自に関わる事件が物語として官僚社会の中で語り伝えられ、さらにそれが文字に定着されることになった、「離魂記」はそのような例だと言えよう。

注

ⁱ 小南一郎『唐代伝奇小説論—悲しみと憧れと—』（岩波書店、2014年）P12

ⁱⁱ 丸尾常喜「分裂と団円—「離魂記」を読む」『東アジア文化論叢（汲古書院 1991年）所収 p219

ⁱⁱⁱ 『全唐文補遺』8輯 p147「唐故常州武縣尉太原王府君（甫）墓誌銘並序」によると、太原の王宙の父の名は王宙というが、母は記してない。なお王宙は元和6年（811年）歿で61才だったので、「離魂記」の王宙と父は名前だけ同じであるが、その関係は確認できない。

^{iv} 西岡晴雄「中国小説史上の虚構の成立とその変容」『信州大学人文科学論集』27号 P54

^v 丸尾前掲論文、p224

^{vi} 小南前掲書

^{vii} これらの恋愛物語はその主人公の男が科擧の受験者で、女が身分の低い者か遊女かである。その恋愛の結末も以下の三通りにまとめられる。

- 1、悲劇—科擧試験に成功した男が当初相思相愛していた女性を捨てた『霍小玉伝』。
- 2、喜劇—科擧試験に成功した男が社会通念に抵抗し、身分の低い女性と結婚する『李娃伝』。
- 3、悲劇と喜劇の妥協—男女ともに社会秩序に順応して、身分相応の相手と結婚する『鶯鶯伝』

^{viii} 内山知也『隋唐小説研究』第4章中唐小説論の第1節「陳玄裕と離魂記について」（木耳社昭和52年1月）p313及び岡本不二明『唐宋の小説と社会』第6章「離魂と還魂—「離魂記」から「金鳳釵記」まで—」（汲古書院平成15年10月）。

^{ix} 守屋美都雄『六朝門閥の一研究—太原王氏系譜考—』（1951年日本出版協同株式会社）

^x 『全唐文補遺』（1995年三秦出版社）

①上柱国清源縣開国南王府君（守節）墓誌文並序 p25（第2冊）

王守節の先祖は太原人で、父は弼で母は清河張氏。天宝11年（753年）歿

②大唐故吳王府騎曹參軍張君（信）墓誌銘並序 p413（第2冊）

儀鳳3年（678）歿、夫人太原王氏景雲元年（710年）歿

③大唐故少府監織染署令太原王府君妻張氏（法）墓誌銘並序 p413（第2冊）

夫人清河人、景雲2年（712）、72才歿、二子。

④大唐故宣威將軍左驍衛河南府永嘉府折衝都尉上柱国王府君（元）墓誌銘並序 p436（第2冊）

太原王元の父は王師、母は清河張氏（696歿）、王元は71才で開元7年（720）歿、二子。

⑤唐故處士太原王府君（智言）墓誌銘並序 p521（第2冊）

王智言開元19年（732）歿、夫人清河張氏開元26年（739）歿

また、全唐文補遺8冊には2例ある。

①大唐故清河郡張夫人（媛）墓誌銘並序 p93（第8冊）

清河夫人は太原王氏に嫁ぐ。貞元元年80才で歿。

②唐故清河郡張府君（彦琳）夫人太原王氏墓誌銘並序 p201（第8冊）

張は大中7年歿、夫人大中8年歿

『隋唐五代墓誌彙編（影印本）』（天津古籍出版社1991年12月）p132、後「王公妻清河張氏夫人墓誌」は活字本の『全唐文補遺』第3冊「唐清河張府君墓誌銘」p280に、収める。

^{xi} 内山前掲書（p319）

^{xii} 『上海師範大学学報（哲学社会科学版）』（2012年11月）p95「唐代王慶誥墓誌反映的太原王氏婚姻關係」

^{xiii} 小南前掲書の第1章「古鏡記—太原王氏の伝承」の中で詳しく述べられている。

^{xiv} 『剪灯新話』卷「金鳳釵記」では「離魂記」の父親の食言による娘の駆け落ちと対照的に、長女興娘の死は父親がいたずらに婚約を守ることによって招いたことと翻案されている。妹の慶娘が興娘の婚約者興哥との同衾を強要、駆け落ちは姉の婚約を実現するためのもので、恋愛か恋情と言った気持ちが一切書かれていない。その婚約のしるし金鳳釵を物語の展開の鍵として使っている。

^{xv} 丸尾前掲論文 p224

^{xvi} 小南前掲書 p39

^{xvii} 溝部良恵「六朝唐代小説史上における諸問題」『東京大学中国語中国文学研究室紀要(4)』2001年7月 p91

^{xviii} 官吏登用試験の一種。「孝」は親孝行、「廉」は清廉潔白の意。漢代から始められ、郡の太守から中央に推挙された。

^{xix} 山東貴族の代表をなすのが清河の崔氏、范陽の廬氏、趙郡の李氏、滎陽の鄭氏、太原の王氏であった。この場合山東は中原地域を広く指す。

（信州大学 全学教育機構 教授）

2015年2月27日受理 2015年3月4日採録決定